

書評

リーダー国転換期：戦争を避けられるか？

高橋一生

リベラルアーツ 21 代表幹事

Graham Allison, *Destined for War: Can America and China Escape Thucydides's Trap?*, Boughton Mifflin Harcourt, Boston-New York, 2017

米国と中国両国の外交分野で一番読まれ、議論の対象になっているのがこの本であろう。2016年に習近平が米国訪問した際、この本の前にアリソンが書いた同じテーマの2本の論文（たぶん中国語に翻訳されたのであろう）をじっくり読み、オバマとの長時間の会談の多くの部分をこの本の内容に関する議論に使ったと云われている。2017年11月のトランプ訪中に際し、読書嫌いのトランプがこの本（たぶん誰かがレジユメをつくったのであろう）を読まされたのは、その行動から明白である。

著者はハーバード・ケネディ・スクールの創設者、かつ1962年のキューバ・ミサイル危機に関する分析を通してすでに古典になっている *Essence of Decision*(1971)の著者として令名が高い。筆者も2つのプロジェクトで共同作業した経験から彼の学識の高さと透徹した分析力には常々敬服している。今回の著作は大学院での教科書風に書かれており、近いうちに世界中の多くの公共政策大学院で若者達にも読まれることになるであろう。

アリソンは、この500年ほどの歴史で世界もしくは主要地域でNo2がNo1にチャレンジしたことが16回ありそのうち12回は戦争になった、と指摘している。「現在中国が米国にチャレンジしつつあり、米中間は戦争に至る可能性が高い：しかし、16回の内4回は戦争に至らなかったのであるから、緊張が高まらざるを得ない米中関係も必ずしも戦争になるとは限らない：戦争に至った状況を明確に認識し、戦争を避けることに成功した4事例から学ぶことによって、米中戦争は避けることもできるはずである」と指摘する。

ツキディデスがペロポネソス戦争を描くに当たり、紀元前6世紀から5世紀にかけてギリシャの覇者であったスパルタに対して、アテネが勃興し、スパルタが疑心暗鬼になりアテネと戦争に至るという点にハイライトを当て、その状況を見事に描いている点をまず指摘する（これをツキディデスの罠と呼んでいる）。そのうえで中国がいかに歴史に例を観ないようなスケールで勃興しているかを描く（これに対比するためには阿南友亮「中国はなぜ軍拡を続けるのか」新潮選書、2017のリアリズムを読むのがいいだろう）

ことによって読者（さしあたってアメリカ人を対象にしているであろう）に覚醒をうながす。アメリカがスパルタのようになってはいけない、と警告をする。

英国に対して、ドイツが挑戦する状況を作ることによって第一次世界大戦が始まる状況を詳しく描く。そこでは日露戦争の結果ロシアの活動の方向が西に向かい、それが第一次世界大戦をもたらす複雑なヨーロッパの状況を作り出す重要な要素になった点も指摘されている。またアジア・太平洋地域での日本の米国に対するチャレンジが太平洋戦争をもたらす状況も戦争を避けることに失敗した例として重視する。これらを含め、12の戦争にいたってしまったケースから、多くのレッスンを引き出している。

逆に、15世紀末ポルトガルに対してスペインが台頭してきたが、法王の仕切りにより戦争を避けることができた。また20世紀初め英国にとって代わり米国が中心になりはじめたが、ベネズエラをめぐる両国の対応によって、米・英戦争を回避し、南北アメリカで米国の主導権を英国が認めることになった。20世紀後半は米・ソが対立したが、直接の戦争には至らず、冷戦という状況を形成し、やがてソ連が崩壊した。1990年初めからヨーロッパにおいて英仏に対してドイツが徐々に中心国になってきたが、これも戦争にはいたらずに済んでいる。この4つのNo1対No2の対立が戦争に至らなかった事例から12のレッスンを引き出している。

ツキディデスが歴史は方向性を作り上げるが、実際に判断するのは人間であり、運命にすべてをまかせる必要はない、と指摘していることを重視して、さて、では現実には米・中関係をどのようにしたらいいのだろうか、という事に結論部分で考察を進めている。まず、それぞれの国にとって喫緊の利害(vital interests)を明確にし、米国に関して言えば、冷戦初期のG.ケナンに等しい大きな戦略（現在ワシントンでは「戦略」という言葉が多用され、それが故に逆に蔑視されているが）を真剣に構築する必要がある。米・中関係に関し、中国のいう大国関係とは別な大国関係を米国が提案すべきである。そして両国は自国の政治体制自身がボロボロになっているが、まずはそれを立て直すことに力を入れなければならないはずだ。このような論旨になっている。

巻末にはNo2がNo1にチャレンジした16の事例がケースブック風(pp.244—286)に簡潔に書かれている。外交史を学んだ人はその多くの部分を思い出しながら楽しむのもいいだろうが、17世紀後半の英国とオランダに関しては「物語 オランダの歴史」、桜田美津夫、中公新書、2017、および16世紀から17世紀にかけてのハプスブルグ対オットマン・トルコと17世紀前半のハプスブルグ対スウェーデンは「ハプスブルグ帝国」岩崎周一、講談社現代新書、2017などで補った方がいいかもしれない。

前書きでトランプと習近平の大きな違いがありながらもその二人の 6 つの共通点を挙げたり、最後の **Acknowledgments** では半世紀にわたるハーバードでの研究・教育生活を振り返ったり、本全体が実に興味深いものになっている。SRID の我々からすると開発協力の対象だった一つの国が世界システム変動論の主役になることによってもたらされる課題を読む、というなんとも居心地の悪い思いをかかえながらじっくりと読まざるをえない本でもある。